エデンの檻　不死身の生き方

名無しめがねMark-?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エデンの檻　不死身の生き方

【Ｎコード】
Ｎ７０３１Ｚ

【作者名】
名無しめがねＭａｒｋ－？

【あらすじ】
漫画を見て、物凄くはまったので書いてみました！
駄文ですが、どうかよろしくお願いします！
ちなみにこの小説には不死身のオリ主（檻だけに）がいますが、大抵原作に沿っていくつもりです。

第一話

いつもよりも肌寒い空気が身を包みこの身を冷やしていく・・・・というか寒すぎる、耳元で聞こえる風も物凄くうるさい。きっと窓でも開けて寝たのだろう。まだ重いまぶたを擦りながら目を開けると、

「・・・何故だ・・・」

何というか・・・絶賛落下中？
見渡す限りの青い空、白い雲。いつもと変わらない景色なのに未来に絶望しかないのは何故だろう？
答えは簡単。眺める高さがいつもと違うからである・・・

「・・・ふむ」

おかしい、さっきまで・・・そう、椅子だ、椅子に座って旅客機が飛ぶの待ってたっていうのに。どうしてこうなった？
しかも下に広がるものは見渡す限りの木々・・・ここはどこなのだろか。

「・・・考えた所で出るわけ無いか」

独り言言っている間にも加速度がどんどん上昇していく中で、着地に備え体勢を立て直す。最も、今いる所は推定三キロ、どう落ちても結果は変わらないと思う。要は気持ちの問題だ。

「衝突事故でも死ななかったが・・・今回はどうだろうな・・」

恐怖など微塵も無い、むしろ好奇心の方が上回っている中、物凄い

高さから叩きつけられ、当然俺の身体は挽肉のようになり、あまりの痛みに意識は遠のいていったーーー

結果としては、無事（？）身体が動くようになった。即死の怪我でも復活するなんて、全くどうなってるんだ、この身体・・・
助かった幸福と自らの体への恐怖が入り混じった中で、ずたずたに引き裂かれた制服を着ながら辺りを見渡すと、空から見たとおりの限りなく緑。鳥なんかの鳴き声が聞こえるまさにジャングル・・・

「・・・グアムってこんなだったか？」

修学旅行で行った場所の景色と見比べてみたが明らかに違う。第一、空から見たのだ。コンクリートの欠片も見えなかったここはグアムではないのであろう・・・とりあえず、今やるべきことは・・・食料調達か。思いたったが何とやら、まっすぐにジャングルを駆け抜けていく。まだ腹は減っていないがいずれ必要なものだ。体力のある今やっておくのが一番だろう。

「もっとも、多分死なないんだろうけどな・・・」

木と木の間を飛び移りながら溜息をついた。試すつもりは無いが多分大丈夫、問題ない・・・はずだ。
それにしても食べ応えの無さそうな小動物ばかり視界に入ってくる。小動物は嫌いだ、いくら処理しても骨が口に刺さりまくってしまう

からだ。今のところ全ての生物が外来種（今まで見たこと無い）だから食ってみた事無いが多分そうだろう・・さてどうするかな・・・ん？
一瞬今までみた事無い色をした物体が見えた気がしたので引き返すと、同じ制服を着た男子が寝ているのを発見した。
気を失っているのか近づいても全く反応が無い。なので、頬を叩いて目を覚まさせることにした。
困っている奴を助けるようなタイプではもう無いのだが、こいつなら、今の状況を説明できると考えたためである。

「おい、起きろ」

「・・・う・・・ん・・？」

「気がついたか？早速で悪いんだが、ここはどこだ？何故ここにいる？」

「ちょ、ちょっと待てって。俺だって何がなんだか・・・っ！りおんは、こーちゃんはどこだ！？」

起きて早々、俺の胸倉掴んできたそいつを見て、本日二度目の溜息をついた・・・はずれみたいだな。

「はぁ・・・知らん」

そんな気持ちを知らない学生Ａは俺の言葉にショックを受けたのか力なく座り込んだ。
こういう反応は当たり前だとわかっているが・・・いきなり自分の巣に水を入れられて入り口を塞がれるアリや、ただいるだけで殺虫剤掛けられるようなハチに比べれば、まだ生存率は高いだろうに・・

・・・面倒だな

「そんな・・・どうなってんだよ・・・りおん・・・こーちゃん・・・」

「落ち着け・・・いいか？今は食うものが無い、そして、ここには何も無い。だから俺はあっちに向かう・・・着いてくるなら来い」

言った後、そのまま指差した方向へ歩いていく。非情だと思うが、他人のことは俺が決めることではない。
もしついて来たなら、あいつを起こしてしまった以上、一緒に行動するつもりだ・・・さてどうだろうkーーー

「ま、まてって！行く、行くから！」

「・・・早いな」

言った途端に俺と並んできたもんだから驚いた。この切り替えの早さは評価すべきだ。
俺の場合、一人の方が効率がいいわけだが・・・まあ、後々良い面も見えてくるだろう。
とりあえず、一緒に行動するなら、しなければいけないことがあったな。

「自己紹介といこう。俺は和島信次。三年四組だ・・・一応な」

「知ってるよ。一緒のクラスなんだから」

「・・・そうなのか？」

予想外の答え。驚いた顔をする俺に向かって何言ってるのこいつ？みたいな顔をする学生Ａ。

「・・・冗談だろ？いくら学校に顔出さないからって、クラスメイトの顔ぐらい覚えとけよ」

「ゴホンッ・・・すまん。あんまり関わらなかったもんだから、いまいち把握してないんだ」

ああ恥ずかしい。片手で顔を覆いながら自分の失敗を責める。たまにあるんだよな。こんなことって。

まあ、とある事情でほとんどの出席しなかった事が大きいのだが・・・

「お前なぁ・・・んじゃ改めて言うからちゃんと覚えとけよ？俺は仙石アキラ、よろしくな！」

こんな状況でも笑顔で手を出してくる仙石に対して好印象を覚えた。こいつは結構良い奴なのかも知れないな。今の所は影の部分がない見当たらない・・・今の所は

差し出されたその手を見ないようにしながら前に進んでいく。あまり深い関係は作らないほうが良い。今までの経験からして良い方向にはいかないことを知っているからだ。

「こちらこそ・・・それじゃあ今起きている事について話すとしようか。仙石、知っていることは無いか？どんなことでもいい」

「・・・・・いきなり大きな揺れがあった後、空が真っ暗になって・・・俺はりおんを探して・・・気がついたらここにいたんだ」

つまり具体的な理由はわかっていないと・・・返って謎が増えた気もするが・・・まあいいだろう。

「なるほど・・・俺は寝てたから全然知らなかった。気がついたら空の上・・全く、大変な目にあった」

「ふうん・・・信次、これからどうすんだ？」

俺の言うことを冗談だと受け取ったのか、さして気にせず話を進める仙石・・・まあ、ミンチの状態から生き返ったなんて誰が考えるだろうか。

「・・・まずここが何処なのか調べてからだろう、少なくとも日本では無いみたいだが・・・」

「そう、か・・・お袋のヤツ、心配してんだろーな・・・」

「・・・なら、早くここから出ないとな」

「ああ、そうだな・・・・・ん？」

「・・・どうした？」

「今、人の声が・・・こっちだ！」

そう言って獣道から外れ、違う方向に走っていく仙石・・・どうするべきだろう。

人助けは必要の無いことだが・・・まったく、本当にはずれだったのかもな、あいつ。

まあ一度一緒に行動すると決めた以上、行くしかないだろう。

仙石とは違い、俺には心配してくれる人が一人もいない。時間はあるのだ、そう急ぐものでもない。
そうやって頭に納得させながら、俺は仙石の行った方向に向かうことにした。
近づいていくにつれてさっき仙石が聞いてであろう呼び声も大きくなってくる。
誰かはわからないが最低でも新たに一人は加わるであろう同行者に頭を抱えながら草木の間を抜けていくと・・・

「・・・？」

一瞬理解できなかったが、そこにいたのは大きな鳥だった。鳥といってもダチョウのような屈強な足を持った種類の。
今そいつに襲われている女性はあの飛行機にいたＣＡだろう・・・
それを黙って見つめる仙石。それに対して何かを言っている男子生徒。
状況から察するに仙石は今からそのＣＡを助けに行こうってわけだ・・・ご苦労なこった。
そんな思いを口にせず、代わりに溜息へと変えて、仙石よりも先に怪鳥の元へと走っていく。
それに気づいた怪鳥は俺に向かって、ものすごい速さで右足を振りぬいてきた。
全く、あの巨体でスピードもあるとなっては当たれば一溜りも無いだろう。

「はぁっ！」

鍛え上げられた動体視力を持って、その足をアッパーで弾く、例え力負けしていようと、力の向きを変えさえすれば受け流すこと位は容易なのだ。最も、その代償に右腕がもっていかれたが。

幾度と無く死を体験した俺にとって、腕が千切れたぐらいでは戦闘に支障は無い。
後ろのＣＡの悲鳴がうるさい中、怪鳥は俺の狙い通りバランスを崩し、大きな音を立てながら転倒した。
いくら人間離れしていても、長時間動き続ければ先に体力が無くなるのは俺の方だ。
なら勝つ為には短期決戦しかない。そして、今がその時だ。

「がぁっ！」

ありったけの力を込めて繰り出された俺のもう一方の手は、ぬめりとした感触と共に怪鳥の目を深々と突き破った。

「クァァァァァァァ！？」

あまりの痛みに耐え切れなかったのか、その腕を抜こうと必死にもがく怪鳥。それを足で抑えながらさらに力を込めて奥へと突き入れると、掻き分けた肉よりも柔らかい感触に指先が触れる・・・これだ

「・・・終わりだ」

無機質に呟くと同時にその物体を手で掴み、ぶちぶちと千切れるのを感じながら、思い切り引き抜く。その瞬間今まで散々動いていた怪鳥の動きはぴたりと止まる。
そう・・・今俺の手にあるのは脳だった。どんな生物でも目は柔らかく、脳はその近くにありながら欠損すれば絶命のいわば弱点なのだ。それを狙わない理由が無い。
少々グロテスクではあるが・・・こうでもしなければ勝つことなど出来なかったであろう。結果が全てなのだ。

「・・・・・」

「ひぃ！こ、来ないで！」

ほんの数分の戦闘が終わり、近くにいたＣＡを見つめると、悲鳴を上げられた。
無理も無いだろう、さっきまで自分を痛めつけていた相手を無傷とはいかなくても短時間で殺した奴なのだ。その顔は恐怖に染まっているのがわかる。
ああ・・・その顔、懐かしいな。まるでバケモノを見るような目・・・なんでこうなったんだろうな・・

「ハハッ・・・そうですか」

震えながらこちらを見てくるＣＡに向かって自嘲めいた笑みを浮かべながら、体中に付いた血や体液を拭っていく。こんな目で見られることには慣れたつもりだったが・・・そう簡単に割り切れないみたいだな・・・

「信次、大丈夫か！？」

少し遅れて、仙石と男子生徒が近づいてきた。
男子生徒は前にいるＣＡと同じような目をしている・・・これが普通だろう。しかし仙石は違った。

「お、おい！」

他の二人が距離を置いているにもかかわらず、こいつは本当に心配したような顔を浮かべながら、男子生徒の制止を振り払って俺に近づいてきた・・・

「信次・・・っ！」

「・・・腕のことなら、心配しなくても良い・・さっきも言っただろ？空の上から落ちてきたって・・・ほら」

ついさっきまで腕は肩から全て無くなっており、その断面からはおびただしい量の血が流れていた。しかし、時間が経つにつれて赤い断面はみえなくなり、かわりにそこから肉がどんどん泡のように湧きでてきて、ついには元通りになったのである。

「「「っ！？」」」

三人ともその変化によってさらに後ずさる。無理もない、こんなこと普通ではありえないのだから・・・当然の反応である。

「・・・やっぱり、そうだよな・・・ハハハッ・・・そう、正しい。正しい判断だよ」

だが俺にとっては残酷で無情な仕打ちになる。こうなった以上、俺はこいつらとはいられない。
少々壊れ気味になりながらも何とか意識を保ち、ここから歩きながら離れることにした。

「し、信次・・・」

「やっぱり無理みたいだな・・・じゃあな、仙石・・・・死ぬなよ・・・」

三人が呆然と立ちすくむ中、俺は一人、その場所をあとにした。

その後どう歩いたか、どう進んだかはっきりと覚えていない。周りの景色が違うことを見ればまだ来ていない場所なのだろうが・・・一人になって、もう数時間が経った・・・と思う。なにぶん時計が無いから時間がわからない。辺りが暗くなっていることだけが時間の経過を伝えてくる。

「はあ・・・・またしてしまった」

あそこに置いて来てよかっただろうか、あの三人。
いくら困っている奴を助けない俺でも今回は例外だ。命が掛かっているのだから、距離を置いたり、無理をしてでもついていったほうが良かったかもしれない。
しかし・・・どうもあの目や顔を見ると冷静になれない気がする。・・・面倒だな、俺。
これから探しにいくにしても道がわからない上に何時間もあそこにいるとは思えない。結局は進むしか無いのだ。

「はぁ・・・・ん？」

もう軽く二桁は超えている溜息を漏らしながら狭い木々の間を抜けていくと、遠くに明かりが点いているのが見えた。
明かりや火を用いる動物は滅多にいない。とすればあそこにいるのはおそらく生存者達なのだろうが・・・どうするべきか。
行ったとしてもまたあんな風になったら、俺はその時、正気でいられるだろうか。俺は自分が思っている以上に臆病だった。そうなるのなら初めから関わらないほうがいいとも思っている。
真剣に悩んだ結果・・・行くことをやめた。
そのほうが俺にとっても、相手にとってもいいことだと考えたからだ。
こんなわけのわからないところに来たんだ。お互い不安の要素は少ないほうがいいだろう。

「きゃあああああ！」

悲鳴を聞いた瞬間、その考えは一瞬で消え去って、考えるよりも先に身体がその光を目指して走り出していた。一体、さっきまでの葛藤は何だったのだろうか？

「・・・全く、損な性格だな、俺は」

嫌われるとわかっていても、見殺しには出来ない。もう廃れきったと思っていた良心は、まだ俺の中に眠っていたみたいだ。
そのことに堪らず、自然と笑顔になった。
そうだ、いい加減吹っ切ってしまえ。自分が正しいと思うのなら、それで良いではないか。欲を捨てろ。一つの機械となれ。
賭ける命は俺だけで十分。何故なら俺の命は無限にあるのだから
血液は沸騰し、心臓は絶えず爆音を響かせている。本来なら苦しく

て全てを吐きそうになるのに、今はそれが心地よく感じられた。
明かりまであと数十メートルの位置になったところで木の枝に飛び移り、全身の筋肉や関節を限界まで引き絞って上へと跳躍する。
おかげで体中の間接は軋み、いくつかの血管から血が噴き出したが、そんなことはどうでも良い。気にすることではない。
上空から辺りを見渡すと、やはり悲鳴の正体は生存者達によるもので、その近くには不時着したと思える飛行機があり、そこへと避難し遅れた生徒達は、次々と巨大な口を持った犬みたいな化け物によって殺され続けているのが見えた。
現時点で俺が出来る最善は生存者の機内への誘導、化け犬の相手といった所か・・・数は五、六匹・・・いけるか？

上手く体を捻りながら落下位置をずらし、化け犬の頭部に拳を落とした。落下のエネルギーを全て腕一本に込めた一撃は凄まじいもので、俺の左腕もろとも相手の頭蓋を砕き、深々と突き刺さりながら怪鳥と同じく脳を破壊した。・・・一匹
・・・足から行かなくて正解だったな、あいつらの骨はあの怪鳥以上に硬い。折れたのが足だったら一発で戦闘不能になっていただろう。しかし数はあと五匹。片腕をなくしたのは痛い。殲滅は不可能に近かった。

「おい、お前ら！死にたくないならとにかく逃げろっ！」

周りの悲鳴よりも大声で注意を促しながら辺りを見渡すと、飛行機の中に入ろうとする一匹を発見。避難地を狙われては本末転倒だ。
周りにいる生存者を助けきれないが、今は多くの命を優先すべきだ。
そいつを片付けるために滑り台を駆け上がって尻尾を掴み、全力で引っ張った。

「うっ、がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

斜面と火事場の馬鹿力のおかげで化け犬を機体から引き剥がすことに成功。一緒に落ちた俺は化け犬がクッションの代わりとなって大したダメージは無かった、その一方、化け犬は当たり所が悪かったためか、血の池の中でピクリとも動かない。
もしこの巨体に潰されていたなら、俺は本日二度目のミンチになっていただろう・・・運が良いのやら悪いのやら。

「何て、笑っている場合じゃない・・・な？」

急いで立ち上がって周りを見渡し、そして絶望した。たった数分で数え切れないくらいの生存者は姿を消し、残っているのは僅かな悲鳴と口が真っ赤に染めた化け犬だけだったのだ。
咄嗟に少数を切った時に理解していたが、やはりつらいものだ。人間がいかに無力か、ちっぽけな存在かということを改めて理解してしまう。
いくら俺一人が頑張ったとしても結果はほとんど変わらないのかもしれない・・・だがそれでも

「諦めが悪いな・・・・ハハッ」

救える人がいる限り、俺は動き続けよう。
身体を酷使し続けたためか、再生が追いつかず、鉛のように重い身体を気合で動かし、残りの奴らへと向かっていったのだった・・・

「・・・どうなったんだ？」

気がつくと俺は地面に倒れていた。空には日が昇り始めていて、制服が上半身から上が無い所を見れば、あいつ等にがっつりと食われたことがわかる。
俺の記憶はあいつ等に向かって行った所で終わっているため、あの後どうなったかはわからない。だが辺りに人の気配を感じない。生存者達は近くにいないのだろうか？
とりあえず・・機内に入ってみよう。何かわかるかもしれない。
ゆっくりと立ち上がって身体の異常が無いことを確認した後、唯一残っている滑り台を使って機内へと入ると、予想通り中には誰もいない、ごみや雑誌等が当たり一面に散らかっていた。
あいつ等がまた中に入って全員食べたとは、地面についた血の量からして考えにくい。
あいつらが離れていった後、ここから移動したというのが一番だろう。しかし、何故だ？
ここはあの滑り台を外しさえすればあいつ等が上ってくることが無い、移動するよりも安全に思えるのだが・・・あいつらの他にも何かいたのだろうか？・・・ん？
考えながら歩いていると遠くに人型のシルエットが椅子に座っているのが見えた・・・あの場所は操縦室だろうか。

「これは・・・刺し傷か・・・・？」

近づいてみるとそれは死体だった、それも病気や化け物ではなく人によって殺されている事が腹に深々と刺さったナイフからわかる。

「・・・一体ここで何が・・・誰だ？」

「ひっ！？」

今まで隠れていたみたいだが、痺れを切らしたのか出てきたところで声をかける。

後ろを向いているのに気づかれたことで驚いたのか、軽く悲鳴を上げられてしまった。声からして女性だろう。

「・・・驚かせてしまってすまない。聞きたいことがあるんだが・・・いいか？」

「う・・・うん」

振り返った後、軽く謝り、質問をすると。女生徒は小さな声で頷き返してくれた。目はそらされているが・・・何故だろう？

考えられるのは

？この女生徒は人見知りが強い・・・違う気がする。外見からして明るい印象がある。

？俺の正体を知っている・・・これも無いな。だとしたら俺の前に自分から姿を現す筈が無い。

？現在上半身裸だから・・・馬鹿か俺は。

「はぁ・・・ちょっと待ってくれ」

「え？ああ、うん・・・」

こちらから話しかけておいてなんだが、俺は変態ではない。よって上半身裸はいけない事だ。
目の前の女生徒に待ってもらい、機内の中を走った。本来なら注意されるような行為でも、今となっては何の意味も無い。それよりも人を待たせているのだから急がないと・・・
確か、俺の鞄は・・・あった。例えどんなに機内が荒れていようと、常に持ち歩いていた・・・云わば身体の一部のような存在である鞄は、直ぐに見つけられる自信があった。
まあそんな話は置いといて、俺が今回の旅行で買った黒をベースとして、そこに白のハイビスカスを散りばめられたTシャツ（まあアロハなのだが）を羽織って急いで戻る。

「ゴホンッ・・・待たせてすまない、さて聞いてもいいか？」

「プッ！・・・ふふっ・・・うん、いいよ？」

出来るだけ無かったことにしたかったのだが・・・それは許してくれないみたいだ。
・・・まあ、そのお陰でさっきよりも硬い感じが無くなったから、結果オーライだろう。

「締まりが悪かったが・・・ここからは真面目な話だ。真剣に答えてくれ」

「・・・・はい」

・・・自分から言っといてなんだが、切り替えが早くて助かる。
ここだけはちゃんと聞いておかないといけない、適当に言われては

駄目なのだ。

「昨日の夜、いったい何が起きた？他の生存者達はどうなった？何故ここに君はいる？」

「・・・どこまで、覚えているの？」

「・・・覚えている？」

質問に質問で返すのはいけない事だと思うが、聞かずにはいられない。

今この子は＞覚えている＜と言った。言い間違えでない限りそれが示すことは・・・

「私・・・見てたんだ。あなたが・・・その」

「・・・・再生するとこをか？」

「・・・・・」

俺の言葉に頷いて肯定してきた・・・だとしたら、おかしい。なら何故今、目の前にいるんだ？

「・・・そこだけじゃ無い、あなたがわたし達を助けていたことも・・・・死んだところも・・・全部」

「・・・怖くないのか？」

「？、どうして？」

俺の問いかけに首を横にして疑問符を上げている・・・・本気で思っていないみたいだ。

「それは・・・まあ・・・人外だから・・・だろうな」

思わず自虐に走ってしまった。人外、化け物、最も聞きなれて、尚且つ嫌いな言葉をまさか自分に向けて言うとは・・・な。

「最初は信じられなかった・・・あんな大きな怪物を一人で相手にして、腕が千切れて足が折れても平然と挑み続けているのが。・・・でも怖くはなかったよ？守ってくれていると分かったから・・・」

「・・・そうか」

何故だろう、言葉の一つ一つが胸に染み込んでくるのが分かる。こんなこと、今までに無かった。
それに対して薄っぺらい返事しか出来ない俺に怒りを覚えてしまう。

「うん・・・だから、護ってくれて、ありがとう」

微笑みを浮かべながらお礼を言ってくるその姿は、大層な気もするが、一生忘れることは無いと思う。

助けた人からは恐怖の目で見られ、生きる意味を無くし、自殺を何度も繰り返す日々、その度に死ねない恐怖を味わい、人と関わることを極力避け続け、社会から完全に切り離された俺が望んだものは、こんな一言だったと今になって理解することができた。
まだまだ・・・機械になるのは難しいってわけかな。

「これが・・俺の答えだったのかもしれない・・・ありがとう・・・

君に会えて、本当に良かった」

「え？あ、ありがとう・・・ございます？」

俺に答えを教えてくれた先生は、何について礼を言われたか理解してないのか、あいまいな返事をしてきた。

「そういえば、君の名前をまだ聞いてなかった、俺の名前は和島信次だ」

「あ、そうだね！私の名前は赤神りおん！こちらこそ、よろしくね！」

そうかそうか、赤神りおんっていうのか・・・・って、りおん？

「りおん・・・仙石の言っていた・・・？」

「っ！アキラ君のこと、知っているんですか！？」

俺のぼやきに直ぐさま反応する赤神。それほど、あいつのこと気にかけてたんだな・・・悪いことしたな。

「あいつとは昨日まで一緒だったんだが・・・すまない」

「それってどういうこと！？」

若干の怒りが込められた言葉に、気まずくなって視線をそらすと、窓からあの三人の姿が・・・よかった、無事だったんだな。

この機体に気づいているのか、真っ先にこちらへと走ってきている。

あと数分あればここまで来れるだろう・・・ちょっとからかってみ

るか。
ついつい緩みそうになる頬を意識しながら、表情を変えないよう話を進めていくことにした。

「ちょっとあってな・・・置いてきてしまった」

「そう・・なの・・・で、でも生きているよね！？」

「・・・さあ、どうかな・・・化け物が普通に暮らしているような所だからな・・・もしかしたら・・・・もう」

「そんなわけないでしょ！アキラ君は必ず生きているっ・・・！」

滑り台の音からしてもう直ぐそこなのだろうが、こちらの挑発？に釣られた目の前の女生徒はそのことに気付いていないみたいだ。
時間稼ぎもここまで、では、そろそろ締めの言葉を言わせてみせようか。

「ほう・・・そこまで仙石が大事か？」

「っ！当たり前じゃない！アキラ君は私の、大事な人なんだから！」

あいつらにも聞こえるよう、少し大きめで言った俺の問いかけに予想以上の答えを大声で述べてくれた。
おかげで、丁度入ってきた仙石の顔が、ものっそい赤く染まっているのが見える。
さて、そろそろ首締めを解いてもらわないと死んでしまいそうだ。
生き返ることは出来ても痛みや寒気は消えない、こんな遊びで死んでたまるか。

「・・・だそうだ、感想はどうだ、仙石？」

「・・・え？」

「り、りおん・・・」

俺が言葉を発した瞬間、首締めを解いて後ろを振り返る赤神。
そこには当然のように赤くなっている仙石。それを見て、さっき言ったことを思い出し赤くなっている赤神。
本来ならここで笑うはずだったのに、酸素を取り込むことに必死の俺。
それらを見て、飽きれたり呆然としている他二名。

機内はほんの少しの間だが生暖かい空気になっていたと思う。

・・・さて、そろそろ行くか。
そんな環境の中、いち早く正気に戻った俺はゆっくりと仙石たちの方へと向かう。
別に何かしようと思ったわけではないのだが・・・ＣＡと男子生徒からは身構えられてしまった。

「・・・すまない、通してくれ」

少し微笑みながら言った。
その事が意外だったのか少し意識が飛んだ様子の二人に心の中で苦笑する。
外に出るためには一番ここが近い出口だと思ってきたんだが・・・
正気に戻っても通してくれる気配がない二人。何故だろうか？

「どこに行くんだよ、信次？」

「・・・戻ったようだな、仙石。とりあえずここから出ようと思う。それからは・・・まあ、あては無い」

「・・・そんなに嫌か？」

「そういうわけではない。むしろ今じゃ一緒にいたいとも思っている」

「だったら・・・」

「けど、無理だ。俺がいたんでは・・・ん？」

話の最中、目の前にいたＣＡが一歩さらに前に近寄ってきて、何か言いたそうにしている・・・が、やはり抵抗はあるみたいで視線は宙をぐるぐるとさまよっていた。

「大森さんっ、ほら！」

それを見兼ねた仙石が後押しすることで、こちらをむいて話しかけることにしたらしい。

「あ・・・あの！・・・・・ごめんなさい！助けてもらったのに・・・私、あんな風に・・・・！」

「ああ、そのこと・・・いいですよ、別に。慣れて・・・無いみたいですけど。いつものことですから」

「そ、そんな・・・ごめんなさい！・・・ごめんなさい！」

俺の余計な一言のせいでさらに申し訳なくなったのか、下げた頭を一向に上げようとしない。
軽い気持ちで言っても決して頭を上げないことは全体から伝わってくる。
本当に気にして・・・いないとは言いがたいが・・・ここは素直に今の気持ちを伝えるとしようかな。

「えーっと、大森さん？顔上げてください」

「・・・・・」

「いいですか？確かに、俺はあの目・・・あの顔は嫌いです」

「ご、ごめんなs「少し黙って」・・・」

「けど、いいんです。俺だって逆の立場だったらなると思いますよ？」

「俺はこの身体が憎かった。何度も思っていました。なんで最初の時、死ねなかったのか、死ねば楽だっただろう・・・って」

「・・・・・・」

「でも、ここに来てわかりました。こんな俺でも役に立てる・・・答えを見つけたんです」

「・・・・・・」

「だから、俺に謝る気持ちがあるのなら・・・一言、お礼を言ってもらえませんか？」

「お礼・・・？」

「ハハッ、変ですよね。それが一番嬉しいんですよ」

「あ・・・ありがとう・・ございます・・・・！」

「どういたしまして・・・・それじゃ、この話は終わりということで、ほら、顔を上げて！」

やっぱりそうだった。この一言が俺の行動の価値を見出している。なら、これからもそれが聞けるよう、頑張っていこうかな。

「・・・お前は俺がいても良いのか？」

「・・・無論だ、これからはお前がいたほうが良さそうだ。それと僕の名前は真理谷四郎、お前と呼ぶな」

一見冷たそうに言われたが、こいつも俺のことを知った上で認めてくれているんだよな・・・

「そうか・・・仙石、さっきの話、取り消させてもらう・・・お前らについていくよ」

自然と顔に笑みがこぼれながらも、仙石のほうに顔を向けながら今度は自分から手を差し出す。

「あ・・・ああ！これからよろしくな、信次！」

その手を握り返して笑顔になる仙石・・・いつ以来だろうか、これ

からの未来に期待したのは。

「こちらこそ、改めてよろしくな、仙石」

・・・これから、さまざまなことが俺たちを襲うだろう、けれど、俺の・・・全てを賭けて、こいつらだけは必ず・・・必ず、守ってみせる。

俺は心の中で、静かに誓ったのだった。

第一話（後書き）

書いてみて感じたこと・・・
主人公の思考がいまいちはっきりしていないような気がしました。
文才の無さの証明だと感じています。
ああ・・・欲しいなぁ・・文才。
そして読み直してみれば、うじゃうじゃ出てきますね、誤字。
本当に申し訳ない・・・
そんなわけで指摘や提案、アドバイス等があれば書いてくださると嬉しいです。では、これからよろしくお願いします！

第二話（前書き）

意外と大掃除なんかに時間をくってしまい、書く事が出来ませんでした・・・本当にすいません。

第二話

「さて、一緒についていくと決めた以上、今後のことについて話し合うことにしようか・・・ちょっと待ってくれ」

機内の中で集まって話をするのに邪魔だったので、衝撃によって外れかかった席を力任せに引き千切って床を作り、円になって座れるようにした。

外でやれば直ぐに済む話なのだが・・・何が出てくるかわかったものではない状況で、ゆっくりと話を出来るとは思えない。

現に昨夜はそこで何人もの犠牲者を出したのだ。極力、外には出ないほうがいいだろう。

それに、機内の中でなら進入口は一つしかない。守りながらの対応も出来る上、最終的に滑り台を落とせば奴らは入って来れなくなる。

結果、ここが現時点で一番安全だというわけだ。

「・・・そういえば質問の途中だったな・・・丁度いい、まずは今までの出来事をまとめてみることにしよう。赤神、今まで起きたことを話してくれないか？」

現時点で一番欲しいのは情報だった。特に赤神に至っては、場所、置かれていた状況が異なっているのだから、確実に新たなものが得られるであろう。

「あ、それなら・・・・えーっと・・あった！今までの出来事をビデオに撮ってある・・・と思うんだけど・・・」

そういった考えを含めて赤神に話を振ってみると、何をひらめいたのか辺りを探すこと数分、一個のビデオカメラを持ってきた。

「それって、エイケンのカメラか！？」

「・・・エイケン？」

「ああ、撮影マニアのあだ名だよ。プロ級のカメラマンなんだぜ！」

「ほう・・・早速見てみようか」

カメラを手に持って撮影動画を探してみると・・・ＡＶのタイトルみたいなものばかり入ってるな・・・どういう奴かは知らんが、第一印象は悪いぞ、エイケンよ。

溜息をつきながら項目欄をさらに下へ進めると、一個だけ名前のついていないファイルを発見した。恐らくこれのことだろう・・・これじゃなかったら、今までの動画を一つ一つ見ていかないといけないので精神的にきついものがある。女性がいるのだからなおさらだ。

そんなことを考えながらファイルを再生してみれば、直ぐに不時着直後の映像が流れ始めた・・・ふぅ

「・・・当たりで良かったよ」

「ん？どうした、信次？」

「何でもない、ほら始まったぞ・・・」

赤神を除いた俺たち四人は内容を一瞬も見逃さないよう、終始無言で見続けたのであった・・・

内容を要約すれば

？事故当時、俺がここに来た時と同じく多くの生存者がいた。何人

かの行方不明者・・・俺たちのような奴らがいたみたいだが大抵無事だったらしい。
？直ぐに無線が通じたとの報告があり、目印となる火を上げていた途中、化け犬が登場。辺りは恐怖の声で満ち、逃げ惑う人々。
？撮影者エイケンは無事機内に逃げ込めたらしく、そこからは中の様子が映し出された。多くの犠牲者が出たことによる悲しみに包まれた中、唯一の希望であった無線での救助が嘘だったことが判明。激怒した生き残りの一人が機長を刺す。顔は人混みに隠れてわからないが、僅かに見える服からして男子生徒だと思われる。
？そのことが引き金となって集団パニックが起こり、そこで動画は終了。

「何でだよ・・・何で・・・こーちゃん・・」

「・・・酷い事が起きたのはわかったが・・・何故、一人残らずいなくなったんだ・・・？」

「土屋機長・・・うっ・・・うう・・・」

それぞれ思う所があったみたいだが・・・俺があの時に止めてればこんなことにはならなかったであろう。
・・・俺が少数を犠牲にしてまで本当の意味で守れたものは・・・無かったのかもしれない・・・何が皆を守るだ。結局、一人舞い上がっているだけではないか！

「・・・すまない、全ては俺のミスだ、目先の脅威に立ち向かうだけで、こんなこと・・・予想できたのに・・・」

そんな自責の念を抱いていた俺は、突然平手で頬を叩かれたのであった・・・赤神？

「そんなことは無い！信次君は私達を助けてくれた・・・！だから、そんな顔しないで・・・？」

少し目に涙を浮かべながら言ってきた赤神を見て正気に戻る。そうだな・・・後悔しても前には戻れない、進むしか無いなら、今からでも常に全力を尽くすだけだ。

「・・・ああ、すまない赤神。君には気付かされてばかりだ・・・皆、一旦落ち着こう・・・赤神、このビデオの後、どうなったか話してくれないか？」

「うん！ええっとね・・・ごめん、機長さんが刺されてからずっと上の部屋に隠れてたから・・・あの時はみんなといることが怖くなって・・・」

つまり、この後の出来事は何もわからないという事か。

「・・・いや、良い判断だったと思う。あの中にいれば確実に何かされていただろうからな・・・」

「赤神はこの学校で人気があるからな、そうみて間違いないだろう」

「結局、皆がいなくなった原因はわからないってことかよ・・・はぁ～あ・・・」

「何よ・・・本当に怖かったんだから・・・あっ、そういえば昨日大きな地震があったよね！？きっとそのせいじゃないかな？」

「・・・地震？そんなもん無かったぜ？」

「うそだぁ！あったってば！」

突然思い出したかのように発言をした赤神の言葉に、俺を除く三人が疑問を持った。

どうやら、三人ともその揺れを感知できなかったみたいだ。一人だけならまだしも、三人全員が言っているのだから本当に無かったのであろう。

つまり、赤神と仙石達の場所はそう離れてもいなかったのに、地震の有無があった・・・これが、重要な鍵だな。

だとしたら、一つの仮説が生まれてくる・・・確認が必要か。

「赤神、地震があったというが、どうしてそうだと思った？」

「それは・・・飛行機が大きく揺れていたのを感じたから・・・かな？」

「ふむ・・・その時、外の状況を見れたか？」

「いや、部屋に窓はついてなかったから見てないけど・・・信次君まで、疑ってるの？」

「そうじゃない・・・真理谷、俺は今まであんな化け物どもを見たことが無い。あれは本当に地球の生物なのか？」

「・・・何故、僕に聞く？」

「俺を含めた五人の中ではお前が一番頭がいいと思ったからだ」

周りの連中が俺に向かって嫌味な視線を向けてくるが、事実そうだ

から何も反論できいないみたいだ。俺だってその事を認めているんだからそんな目で見ないで欲しい。

「ふっ・・・いいだろう。答えはそうだ。あれは確かに地球に存在している。いや、正確には>していた<、だったか」

俺の答えに少し笑みを浮かべながら自らのパソコンに電源をいれて、あるソフトを起動させた。
画面には今までにあった奴らの画像がいくつも映っている。見たところ動物図鑑のようだった・・・なるほど。
これはただの図鑑ではない、動物は動物でも現在は存在しないはずの絶滅種だったのだ。
そこらかしこに何千万年前だと書かれてある動物達、道理で見たことが無いわけだと、かえって納得がついた。
そして、この仮説が正しいという証明にもなったわけだ。

「なるほど・・・原因がわかった。まずは赤神の言った地震、あれは間違いだな」

「えっ!?本当に、揺れたんだってば!」

「それだけでは地震とは限らない。ここでは常識が通用しないということだ」

「地震とは限らない・・・・そうか!」

最初に気付いたのは真理谷だった。やはり俺の踏んだ通り頭が良いな。
この事を聞いても頭に疑問符を浮かべる三人・・・まあ、無理もないか。

「一体どういうことだ?説明してくれよ!」

「つまり・・・赤神が感じた揺れの正体はあの化け物たちの仕業だと思う」

「「「なっ!?」」」

「仮に今まで出会った奴よりも大きな化け物が現れてここを襲ったのなら、揺れはここでしか起きない上、皆が逃げ出す理由にもなるからな」

「そ、そんなもんが近くにいるっていうのか!?」

「あくまで可能性だが、ありえない話じゃない・・・・よく気がついたな」

「偶然だよ、さっきの会話がなかったら全く気付かなかった」

「そ、それなら!早くここから逃げないといけないんじゃ「静かに」・・・はい」

慌てふためく大森さんを手で制止しながら落ち着かせる。ここで一人がパニックになったら全体にも影響が出てしまう。そのことを知っているから俺だから表面的に冷静になっているだけだ。

・・・というか、一番の年長者がこんな調子で、これから大丈夫だろうか・・・今はそんなこと思っている場合じゃない。

「・・・みんな、落ち着いて聞いてくれ。話の内容からして、そいつらが来たのは夜。時間はまだある、俺は可能な限りここにいよう

と思うんだが・・・どうだ？」

「ど、どうして？今すぐ逃げたほうが良いと思うんだけど・・・」

「りおんの言う通りだ、さっさとここから出ようぜ！？」

「・・・救助が来るかもわからない状況で何も持たずに行動するのは危険だ。少しでも用意があったほうが良いだろう？」

「「・・・・なるほど」」

「だが・・・決まった時間にそいつらが来るなんて限らない。途中襲われでもしたら・・最悪死ぬかもしれない・・・だから、皆はどこか遠くに避難しててくれ、目印を立ててくれれば、準備が出来次第、俺も向かえる」

死ぬ事の無い俺だから出来る提案。そのほうが守る必要は無いから苦労は減ると思う・・・最も荷物の保障は出来ないが、一番安全だと思われた。

その提案に対し、黙り込む面々・・・折角ついた避難地が、そうでなかったのだから落ち込みもするだろう・・・

しかし、次に起きた行動によって、俺の予想は全く外れていた事を理解した。

「じゃあ、私は医療品のチェックしときますね！これから必要になってくると思いますから！」

なんと一番の怖がりだった大森さんが立ち上がって早々に、そんなことを笑顔で言ってきたのだ・・・聞こえてなかったのか？

「・・・話が理解できていｎ「じゃあ私は、食料の確保！探せばいくらでも出てくるよね！？」・・・おい」

まさか赤神までもが言うことを無視してきたことに対して、さすがの俺でも腹が立った・・・そんなに俺は信用されてないのだろうか？

「今、お前が何を思っているかは知らないが・・・お前だけに任せられないんだろう・・・フッ・・・地図の製作をしてくる。・・・用があるなら羽の上まで来るんだな」

「真理谷・・・・・皆、死にたいのか・・・？」

「何言ってんだよ？そんなわけねーだろ。・・・きっと、お前の助けになりたいんだよ」

「・・・なんだと？」

「何でも一人でやりすぎだと思うぜ？少しは、俺たちのことも頼ってくれ・・・仲間だろ？」

ああ・・・そうだったな、今まで経験が無かったからわからなかった。

何も一緒に行動するだけが仲間ではない。お互いに協力し、助け合いながらどんな壁でも乗り越えるものが本当の仲間・・・か・・・

案外、俺が手に入れたものは想像以上に大きなものだったみたいだ。

「そう・・・か・・・ああ、そうだな・・・すまない、どうやら誤解していたらしい・・・・手伝ってくれるか、仙石？」

「おう、任せてくれ！どんな事だって、さくさく片付けてやるぜ！」

「ハハッ、頼もしい限りだ。それじゃ、ついて来てくれ」
さっきまでの事を軽く謝った後、仙石と共に下へと向かっていく。
一人では無理だとしても、今ならどんな事だって出来る・・・そんな気がした。

「・・・なあ、ちょっと休憩しよーぜ？もうこれぐらいで十分だろ」
「はぁ・・・多くあって困ることは無い、やると決めた以上可能な限り探さなければ・・・手回しライト発見、これは使えるな・・・疲れたのなら休んでもいいんだぞ？」

今いる所は、丁度座席の真下にある荷物置き場・・・貨物室である。そんな所で一体何をしているかといえば、良く言えば道具集め、悪く言えば火事場泥棒に当たる行為を、もうかれこれ一時間くらいやっているのではないだろうか。
ここには機内にいた客達の荷物全てが入っている。そして、この機内に乗っていたのは全員が生徒だったわけではなく、一般客もいるのだ。その人達の荷物には俺たち学生と違って持ち物に制限が無い。つまり、その中には使える道具が大量に眠っているだろう・・・そう話した時の仙石は、まさに好きなおもちゃを箱の中から探すような目の輝きを放ちながら、手当たり次第に開けまくっていた・・・が、結構な時間がたった今では飽きたのだろう。
さっきから疲れただの、はずれだのと、こっちに向かって言い続け

てくる。そんなに疲れたのなら休めばいいものを・・・今まで何度もそうするよう勧めているのだが・・・

「はぁ・・・お前がしてんのに、俺だけ休めるかよ・・・」

この調子でまた再開し始めるのだ。今までのことからこいつの性格がなんとなく掴めてきた気がする。

きっとお人好しの人気者だったたんだろうな・・・こいつと知り合えてよかったと思う・・・途中、俺の方からから別れてしまったが。・・・まあ、今こうして会話できているのだからいいだろう。

「なら頑張るしかないな。後少しだ、早く片付けて次に進もうじゃないか」

「げっ、まだあんの!?」

「当然、急がないと間に合わないぞ?」

「・・・・引き受けるんじゃなかった」

その後は一言も話さずに黙々と作業をしたおかげで、数分後には中身を全て出すことが出来た。

ここから出した物の整頓等をしないといけないとなると・・・俺でも嫌になる・・・知り合えて本当によかったよ。

適当な大きさのリュックを五つ用意し、整理した荷物類（工具やライト等）を俺と仙石のリュックに詰め込み終わったところで、ひとまず作業は終了。
残りの三人には医療品や食料、衣服なんかを持ってもらうつもりだ。体格からいって俺以外の奴に重いものは持たせたくない。確実に走れなくなるだろうから。
俺、仙石、真理谷、大森さん、赤神の順に比率ですれば、５：３：２：２：３がベストではないかと思っている。

「ああ～～～・・・やっと終わった」

「それじゃ次の仕事に移るか。仙石、真理谷を呼んできてくれ」

「・・・まだ何かすんｎ「その必要は無い、一体何の用だ？」・・・俺、関係ないなら休んでいいか？」

「構わない、ご苦労さん。本当に助かった。感謝している」

「ああ、どういたしまして・・・じゃあそういうことで」

ぐったりとした様子の仙石がゆっくりと上に戻っていくのを見送る・・・良く頑張ってくれたよ、本当に。
お前がいなかったら絶対に間に合うことは無かった・・・今からやることも出来無かっただろう。

「さて・・・丁度いいところに来てくれた。残りの時間である物を作ろうと思っているのだが、その事に関して一つ聞きたかったんだ」

「・・・何だ？」

「ここを整理しながら考えてたんだ、もしあいつらが襲ってきた時どうすればいいか・・・いつまでも逃げれるとは限らないからな」

「つまり、撃退する為の武器が欲しいと？」

今度また大量に出るかわからない中で前のような戦いはあまりに非効率すぎる。しかし、ただの武器では駄目だ。
木や石なんかで作ったものでは目立ったダメージを与えられず、かといって鉄を材料とした武器はナイフのような短い物しかないため致命傷を与えることは出来ない。
新たに作るとしても鉄の加工は難しい。有効な武器を作るのはまず不可能だろう。

「理解が早くて助かる・・・そこで質問だが、ビデオで見たあの化け物・・・火を恐れていないようだった。実際どうなのだ？」

「・・・いや、アイツらは知らないだけだろう。生きていた時代にまだ火は無かっただろうからな。今回のアンドリューサルクス・・・化け犬と呼んでいたものの襲撃の理由は、恐らく見たことの無いものに対しての好奇心によるものだ」

その一言を聞いて安心した。もしそうじゃなかったらまた初めから考え直さないといけない所だった。

「つまり、火は有効なわけか・・・じゃあ、取り掛かるとしよう。・・・手伝ってくれるか？」

「・・・一応言っておくが、力作業は得意ではない・・・いい加減何を作るか教えたらどうだ？」

「そうだな・・・やって欲しいのは、ここにある余った服をガラス瓶の口が塞げるくらいに裂き続けていく事。俺はその間に上に上がってこの機体の燃料を汲んでくる・・・これがヒントだ」

キーワードはガラス瓶、布で作った蓋、機体の燃料、そして先ほどの質問。これぐらい言えばこいつは解るだろう・・・って、自分で言っといてなんだが、こんな状況で問題出すぐらいの余裕でいいのだろうか？

「・・・なるほど。確かに、それなら殺すことは難しいが、確実に時間稼ぎは出来る・・・わかった。出来るだけ大量に汲んでこい。あればあるほど、これから助かる物だからな」

答えが解った嬉しさによるものか、ニヤリと小さく笑う頭脳派男子生徒・・・相手も話に乗ってくれているのだから気にしないでおこう。

「もちろんだ、材料はいくらでもある。可能な限り作り続けよう・・・そっちこそ大量に用意しておくことだ、足りなくなっても知らんぞ？」

言葉を合図にして、お互いの作業を開始する。それから数時間、二人の間に会話は無く、ただ黙々と同じ作業を繰り返していったのであった・・・

「仙石がいなくなった・・だと？」

割れた窓からオレンジの光が差し込み、太陽が徐々に沈んでいく中、ある事件が発生した。そう、仙石がどこかに行ってしまったのである。

今まで下の貨物室で作業をしていたことで気付かなかったが、少し前から見当たらなかったみたいだ。

上にいた女性陣は最初見たときは客席に座ってくつろいでいたとの事。しかし、それぞれ仕事があった事もあり、いなくなった事に対してまで気が回らなかったみたいだ。

「うん・・・てっきり信次君達の所に行っているんじゃないかと思ってて・・・・どこに行ったのよ・・・」

「ど、どうしますか？もう時間なんじゃ・・・・？」

「・・・ここまで探していないとなると・・・やはり外に行ったみたいだな・・・馬鹿が」

・・・真理谷の言う通り、俺たち以外の人の気配は機内には見当た

らなかった。最も、こんな状況でわざわざ隠れて心配させるような奴では無いのだから、もし機内にいたとしたら自分から出てくるだろう。
しかし、何故外に出たのだろう？外にはまだ見たことが無い化け物共がたくさんいる事はあいつだってわかっているはずだ。それを承知の上で何も持たず、一人だけ逃げたとは考えられない。
・・・やめだ。今はそんな事を考える時ではない、本人にまた会った時に直接聞くことにしよう。
それよりも今を考えよう。時間は残り僅かしかない、本来なら今はもうここを離れている予定なのだ。

「私、もう一度外を見てくる！絶対アキラ君は近くにいる・・・そうだよね、信次君！？」

「もうやめておけ・・・時間が無い。僕達だけでもここを離れたほうがいい・・・」

「か、和島君？どうしますか？」

このまま仙石を探すことに時間を費やすことは、文字通り皆の命に関わってくる・・・迷っている暇は無いな。

「・・・よく聞いてくれ。真理谷の言う通り、今はここを離れたほうがいい・・・三人は各自のリュックと仙石の分を持って移動してくれ」

「そ、そんな！？アキラ君を置いていく気なの、信次君！？」

俺の案に驚いたのか、大声でこちらに詰め寄ってくる赤神。・・・確かに、少し前の俺ならこれだけで終わっていただろう。だが、今

は違う。皆を守ると誓った・・・一つとして欠けて良いものは無い。

「・・・一晩だ」

「え？」

「今晩、俺だけここに残って仙石を待つ。それで来なかったら諦めるつもりだ・・・それでいいだろう？」

無論、それは嘘だ。来なかった時は仙石の死が確認されるそのときまで、諦めるつもりは無い。

「馬鹿なっ！？ここに奴らが襲ってくると言ったお前が残るだと！？一旦何のために！？」

「無論、先ほどいった通り仙石を待つため・・・その他にも二つある。一つ目は火炎瓶の生産、まだ材料は残っているのだからずっと作るつもりでいる・・・そして、もう一つは実証。ここに来ると予想しただけであって、まだ確定しているわけではない。ここにいれば、皆がいなくなった原因がわかるだろう？」

後の二つは思い付きだ。これ以上新たに火炎瓶を作ったところで、そう何本も持ち運ぶのは危険だ、死の恐怖が纏わりつくベストを常に着るようでは、いくら俺でも精神がもたない。そして、もう一つの原因探しも命を賭けるほど気になるわけではない。。

「そ、それなら私も・・・！」

「いや・・・仙石が来たら一緒に逃げるだけだ・・・今回は一人のほうがいい。それに、赤神たちが荷物を持って行ってもらったほう

が俺としては助かる」

「で、でも・・・」

「今回は・・・俺の言うことを聞いてくれ・・・頼む・・・」

「・・・・・・・うん」

頭を下げて言う俺に対して、これ以上引き下がることはできないと思ってくれたのだろう。

三人とも俺の言う通り、荷物を持って外に逃げることにしたらしい・・・

「・・・で、僕達はどうすればいいんだ？どう連絡を取るつもりだ？」

「そうだな・・・日が暮れるまでに隠れる場所を探し、そこで一晩明かした後、何かを使って煙を上げてくれ。発見しだい、俺たちもそこに向かう」

「わかった・・・死ぬ事は無いみたいだが・・・頑張ることだな」

「ハハッ、お互い様だろう・・・頼りにしているよ、真理谷」

「・・・フンッ・・」

「和島君・・・本当なら年長の私が残るべきなのに・・・ごめんなさい・・・」

「いいですよ、怖いのは皆一緒ですから。それよりも、そう思うな

ら俺がいない間、しっかりと二人をまとめといてくださいよ？」

「は・・・はい、任せてください！二人は必ず、私が守りますから！」

「信次君・・・アキラ君・・・またいなくなっちゃうのかな・・・？」

「そう思っていないから、俺は残るんだ・・・大丈夫、あいつはこんな所で死ぬような奴じゃない・・・そう信じている。だから今は生きてまた会えることだけを考えよう」

「うん・・・頑張ってね、信次君・・・」

「もちろんそのつもりだ・・・皆無事に明日会おう」

そういった会話を最後に、俺を除いた三人は飛行機から出て行ったのであった。

「・・・さて、いい加減どちらかが出てきてもいいのではないか？」

皆が出て行った後、自分の荷物を外に置いたり、機長の埋葬等をした後、機体の天井に座り続けて一時間ほどが経った。
ずっとここにいるせいか、目が慣れてしまって光が無くとも遠くまで見渡すことが出来る。辺りは一面闇に包まれ、独特の不気味さが漂っているが、未だに何かが来る気配は無いようだ。
俺の予想は間違いだったのだろうか？そう考えた瞬間、遠くの方で鳥が一斉に飛び立つのが目に入ってきた。木々に囲まれているせいではっきりと見えないが、大きな山みたいなものがゆっくりと近づいてきている。恐らくあれが原因だろう。

「・・・出来れば当たって欲しくなかった・・・でかいな」

近くに来るにつれてだんだんと形がわかってきた。熊のような体つきだが牙は見当たらない、恐らく草食動物なのだろう。大きな鉤爪、全身が毛深く大きさは大型トラック並だろうか？
数は背中に乗っている子供も含めて七頭。それぞれがこの機体に身体を擦り付けたり上から乗しかかったりしている。
確かに、こんな物ががいきなり来れば皆は逃げ出し、中では地震と勘違いしたりする揺れも起こる事だろう。しかし、落ち着いて考えてみれば、こいつ等は俺たちを食べるために来たわけでは無く、真理谷の言っていた＞見たことの無いものに対しての好奇心＜というもので、それは飛行機に向けられたものだったのだろう。そうでなかったら昨日の夜、俺の下半身もこいつらに食べられていただろうから。
そうとわかればこちらから別に何かしない限り、向こうからも何かするわけでは無いはず。なら、一番高い羽の上でこいつらがじゃれついているとこを見ているとしようかな・・・ん？
良く見たらこいつらの茶色にまぎれて白色の小さな人影が一つ見える・・・よかった、無事だったんだな。

「なら、ここに居る理由も無いわけだ」

こちらからは遠くて表情までは見えないが、大方いい事なんか考えていない雰囲気が漂っている。ここは早く呼びに行くべきだろう。この大熊もどきがいない所から足が折れるのを覚悟して飛び降りる。しかし偶然にも着地が良かったのだろうか、数十メートル上から落ちて足首すら挫く事は無かった・・・いや、これは偶然だけでは済ましていけない気がするが・・・今は考えることよりもやることがある。

「どうしたんだ、いきなりシャツなんか脱いで。まさかあの中に飛び込むつもりだったのか？」

「うおっ、し、信次！？み、皆は無事なのかよ！？」

「大声出すな、あいつらに気付かれると面倒だ・・・皆は問題ない、既に避難している・・・ほら、俺たちも行くぞ」

襲われることは無くとも、ここに居ても仕方が無い。あの様子から見たら今晩中に機体は壊れてしまうだろう。
事前に外に置いておいた俺のリュックをからいながら、ひとまず移動することにした。

「一体・・・今までどうしてたんだ？」

「あ・・・ああ、まあ・・・いろいろあったんだよ」

「そうか・・・・ふんっ！」

頭をかきながら視線が宙を彷徨う仙石の頭にチョップを振り落とす。軽めにやったつもりだが中々効いたみたいだ・・・頭を怪我しているのだろうか？

「いったぁ！？叩くこたぁねぇだろ！」

「・・・当たり前だ、お前のおかげでこっちは大変だったのだからな、一発で済むだけましだと思え」

「・・・すまん・・・」

「・・・もういい。けどこれからが酷いぞ、赤神の心配した様子は相当なものだったからな・・・覚悟しておけ」

「げ！？マジかよ・・・勘弁してくれ・・・」

「明日までに、良い言い訳を考えておくことだ・・・今日はあそこで寝よう。夜に動くのは危険だからな」

適当に歩くこと数分。手ごろな洞窟を発見した。中の様子を確認してみたが、ここに動物の住んでいる形跡は無い。
リュックの中から用意していた食料をだして、二人で分けながら一夜を過ごす事にしよう。

「なあ、信次・・・少し話しようぜ？」

「起きたのか・・・別に俺は構わんが・・・いいのか？少しでも休んでいたほうが身のためだぞ？」

死ぬことの無い俺はずっと寝ずに過ごした所で身体への影響は少ない。そのため俺が仙石に見張りを買って出たら二つ返事で了承してくれた・・・昨日は本当に疲れたんだろう、さっきまで隣で大の字になって寝そべったまま、ピクリとも動かさないでいた・・・しかし・・・見張りはこれといってやることが無い・・いや、正確にはあるのだが、それらの作業は周りが明るくないと出来ないものばかりだ。飛行機から持ってきた時計を見れば、もうとっくに日付は変わっているのだがまだ日が昇るまで幾分時間がある。かといって火やライトを点ければ、それによってまたあいつ等を呼んでしまうかもしれない。結果、ただ呆然と周りを見渡すだけ・・・暇になるのだ。

だから今は仙石の提案を嬉しく思った。

「これ以上寝ることができねーんだ・・・んで、話っていうのは、今日りおん達に何て言えｂ「知らん」・・・わかった。これは自分

で考える・・・じゃあ他に何かあるか？」

「そうだな・・・お前は赤神とどういう関係なんだ？見たところ付き合ってはいないようだが」

「ぶっ！？な、何でそんなこと訊くんだよ！」

「大声出すなといっただろうが・・・別に他意は無い。これと言って話題が無かったから、なんとなくだな・・・で、どうなんだ？」

「・・・ただの幼馴染だよ・・・なんとも思っちゃねーよ・・・」

その反応は好きと言っているようなものだと思うのだが・・・見たところ両思い。どちらかが言えば必ずそれ以上の関係に発展するだろう。

「そうか・・・まあ、こんな状況だ。何より優先すべきは己の決断力・・・とだけ言っておこうか」

「何の話だよ・・・・そういうお前はいないのかよ？好きな奴の一人ぐらいいるだろ」

「俺か？・・・好きな人・・・・・・いないみたいだな」

「みたいって、そんなことわかんねーの？」

「まあ・・・な、そういった感情はまだ抱いたことが無い。ここに来るまで、極力人との関係を作ろうとしなかったからな」

「そうなのか・・・すまん。嫌な事訊いちまって・・・」

「作ろうとしなかった俺が悪いんだ。謝られると困る。ああでも、もし選択が違えば、あるいはそうなっていたかもしれない奴ならいたぞ？」

「へえ・・・名前なんていうんだ？」

「ハハッ・・それが忘れてしまってな・・・・何せ小学生前期だったから・・・あだ名は覚えているのだが・・・」

「なんじゃそりゃ・・・んで、何ていうんだよ？」

「＞カズ＜と＞まーや＜・・・聞いたことあるか？ああ、カズは男だ」

「ん～、無いな。どういう奴だったんだ？」

・・・何でだろう、異様に食いついてくるな。それほど興味をそそる話題だろうか？それか、単に何も話す話題が無いから聞いているだけなのだろうか？・・・まあどちらでもいいか、所詮は時間つぶしだ。

「そうだな、カズはとにかく友達思いのいい奴で、まーやは・・・喧嘩が滅法強かった、それこそ年上の男に勝つぐらい・・・今思うとあいつも中々の化け物だったか・・・それで何故かは知らないが大抵、何をするにしても三人いっしょ。時には喧嘩もしたり一緒に寝たりもして・・・本当に仲がよかったものだ」

「ふーん・・・それで、気付かれたのか？」

「・・・少し違う。その時はまだ俺自身も知らなかった・・・俺のほうから関係を絶ったんだ。四年の三学期ぐらいだったか・・・車に引かれて・・・意識不明の重体、死亡が確定した後生き返った事がきっかけで、病院での血液、臓器、脳波なんかを色々検査や実験されまくった。そのせいで登校するのは月に数回が当たり前、今までの不登校もそれが原因だ・・・不定期な登校と俺自身が二人に会いたくなかったことが重なってか、それから一度も話すことなく卒業。それが続いて現在に至るわけだ」

「・・・なんか、すごい話を聞いた気がする・・・重いな」

やはり流し聞きだったか・・・まあ真剣に聞かれると場が重たくなるから、丁度よかったのだが・・・こんな話簡単にするべきじゃなかったか。

「まあ、そんな話だ。・・・そういえば言い訳の件、まだ考えてないのだろう？早く考えないと日が昇ってきたぞ？」

「やべっ、そうだった！一体何て言えばいいんだよ！？」

転がりながら考え込む仙石を無視し、朝日が暗闇を消していく様を見ながら立ち上がりふと思ったのであった。

「あいつらも・・・生きているだろうか？」

第二話（後書き）

とりあえず一巻終了！
だいたい二話で一つの巻が終わるペースになるのではないでしょうか？
あれ？って事はこの作品のヒロイン、二桁越さないと出てこないのではないか？
巻きが必要かもしれませんね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7031z/

エデンの檻　不死身の生き方

2011年12月30日23時48分発行